【書　評】

東邦銀行編『東邦銀行80年史』（2022年６月刊）

東北学院大学　経済学部
教授　白鳥　圭志

はじめに

2021年11月４日に、東邦銀行は創立80周年を迎えた。これを記念して編纂・刊行されたのが『東邦銀行80年史』（以下、本書と略記）である。私事で恐縮であるが、約30年ほど前、福島市で暮らしており、東邦銀行を利用させていただいていた。佐藤稔現頭取は大学の大先輩とも伺っている。それゆえ、個人的に懐かしさと親しみがある。若かりし頃の懐旧と親しみの念を込めて、心より祝意を表したい。本書では、1941年の東邦銀行の新立の前提となる明治期以降、昭和初期までの福島県金融界の概況から、創立80年までの歴史を簡潔かつ分かり易くまとめている。以下では、評者からみてポイントになる点をまとめておく。その上で、特徴と幾つかの注文、そして同行へのお願いを記させていただく。

１．内容紹介

（１）東邦銀行新立前史

ここでは明治期の製糸金融の興隆から、1920年反動恐慌以降、特に昭和金融恐慌期における福島県金融界の壊滅的打撃について説明がされる。その上で、前身銀行のひとつである郡山商業銀行、白河瀬谷銀行、会津銀行の前身三行が堅実経営ゆえに、この危機を乗り切り、東邦銀行成立の歴史的前提条件が形成されることが概説される。その上で、戦時体制下の1941年に同行が新立されることが略述されている。その際、会津銀行では一部に反対運動があったという。東邦銀行の行名は「東から光を背負って進む、発展する銀行」という意味があるという（11頁）。

（２）戦時と戦後復興期

同行は、当初、県庁所在地の福島市に店舗をもっていなかった。大蔵省、日銀からの勧めで創立翌年に福島支店を設置し、44年に常陽銀行から桑折、深川両支店の譲渡を受けて、県北に支店を拡充した。この間、戦時下の銀行合同政策に対応して、岩瀬興業、三春、猪苗代の各行（1942年）、磐東、田村実業、矢吹の各行（1943年）と、県内の残存銀行の合同をはかった（11頁）。これにより、福島県内の本店銀行は、同行のみになった。もっとも、経営は、看板は一枚であるが、前身三行の寄り合い所帯のような状況だったという。戦時下の行員の応召により人材も不足していたという（以上、13頁）。敗戦後には、本店を福島市に移し、県金庫、日銀代理店の引き受けを行った。

（３）戦後復興期から高度成長へ

この時期の東邦銀行は、インフレ対策に対応する形で預金量の急拡大が見られた。しかし、内部体制がこの拡大に追い付かず、人材、組織、運営の整備充実が経営課題となった。この課題に取り組んだのが、須藤仁郎頭取であった。須藤頭取は、特に人材育成に意を注ぎ、研修会や勉強会の充実を図ったという。行内報の発行もこのころからはじまった。このほか、1956年には東京支店が設置された。健康保険組合、行友会が設置されたのも、このころであるという。

（４）高度成長期

この時期の東邦銀行は、中長期の経営計画を策定して、業容の拡大をはかった。その際、大衆化を推進して、個人取引の拡大をはかった。さらには、店舗網の充実もはかり、日立、水戸、宇都宮、仙台などの隣県の都市に支店を設置した。

（５）低成長期

低成長期にはいっても、同行は預金量を伸ばし続けた。その際、３Q（Question, Quick, Quality）を重視した。効率的な経営の実現を目指して、1972年から総合オンライン・システムの導入をはかった。78年には全店オンライン化が実現した。同時に、郊外支店の充実など店舗網のさらなる拡充も果たした。73年には東証二部上場を果たした。

（６）1980年代ーバブル経済期ー

この時期になると、同行は、業容の拡大から経営体質の強化を重視するようになった。具体的には資金運用力の向上が重視された。この方針に基づき営業本部制、事務本部制が導入された。さらに、Electric Banking（EB）に対応して、EB推進チームを設置して、これを推進した。このほか、1989年の大東相互銀行、福島相互銀行の地銀転換による競争環境の変化に対応して、県内トップバンクの地位を維持することを目的に据えた。

（７）バブル崩壊から2001年まで

周知のとおり、この時期の日本の金融界は、不良債権問題に悩むことになる。東邦銀行は、引当金の積み増しや、不良債権の大幅償却により、一時、赤字決算に陥った。この措置は「健全経営を強固にするため」に避けられないことだったという。企業倫理を重視して、コンプライアンスの充実も図った。さらに、顧客の利便性向上を目的に、店舗網の拡大や各種金融商品の取り扱いの充実をはかった。これにより顧客満足度の向上をはかろうとした。新しい事務センターの設置や社会貢献活動、特に後者の一環としての福島経済研究所の設置がされたのもこのころである。

（８）2002年から2010年まで

この時期は、確定拠出型年金、生命保険商品、個人向け国債の取り扱い、本店営業部における証券仲介業務の開始、ローンプラザセンターを開設するなど、取り扱う金融商品や金融サービスの充実を図った。リレーションシップバンキングの充実にも取り組み、地域再生ファンドである福島リバイタルファンドを設置するなどの経営施策をとった。

経営効率化にも積極的に取り組み、総合勘定系システムの導入（2003年）や、インターネットバンキング、アイワイバンク銀行（現セブン銀行）とのATM提携を図った。

（９）東日本大震災への対応と「最近10年のあゆみ」

周知のとおり、福島県は、福島第一原発の爆発にみられるように、東日本大震災により甚大な被害を受けた。同行は、原発周辺地域からの避難者への円滑な資金供給策をとるとともに、休日営業を実施するなどして、資金面から被災者支援を行った。さらには、相談窓口を設置するなどして、個々の顧客被災者の状況を踏まえたきめ細かい対応をとる体制を整えた。さらに、支援物資の提供なども行い、被災者支援を積極的に行った。

以上の歴史的過程の概説を踏まえて、最後に、「最近10年の歩み」として、それぞれの年の重要なトピックスが紹介されている。

２．本書の特徴と注文

（１）特徴と注文

本書は、恐らくは金融知識のない一般の顧客や取引先、福島県の地域史に関心を持つ一般県民を読者層に想定していると推察される。実際、

記述がコンパクトであり、評者による拙い内容紹介からも伝わるように思われるが、時代ごとの経営上の要点や特徴が的確におさえられている。特に、各時期別に作成された経営に関する年表の存在は、一般読者に対してとても親切な配慮であると言える。しかも、写真資料（特にカラー写真）も豊富に利用されている。視覚的に学びやすい上に、説明も非常に分かり易い。このような特徴をもつ本書は、金融に関する知識のない一般の人達にも、非常に親しみやすい内容になっている。想定している読者層が上記のものであるとすれば、本書の内容は十二分に成功している。本書の編纂担当者は、金融に関する知識のない一般の人達にもわかるように、随分と工夫に工夫を重ねられたものと推察される。本書の編纂担当者の皆様方には、深い敬意を表したい。

もっとも、それだけに注文したい点がある。本書は、デジタル形式でのみ公刊されたと伺っている。もし、この話が本当であるとすれば、一般の顧客や取引先の方々、広く福島県民が読むことは難しいのではあるまいか。もしかしたら、この程度のことはしているのかも知れないが、せめて、各店舗に置く分や県立図書館など県内の図書館に配布するものだけでも、書物などの紙ベースで発行してもらえていれば、幅広い人々が眼にし易いものになると思う。このことを是非とも注文させていただきたい。もし、このことを行っているようであれば、大変失礼なことを記すことになる。そうであれば、事情をご賢察のうえで、ご容赦願いたい。書物の形態で発行されていないと、図書館で検索する際にヒットしない恐れがある。さらには、10年、20年と時が流れたのち、そもそも『東邦銀行80年史』が公刊されていたという事実自体が歴史の闇にうずもれてしまう恐れもある。評者としては、このことを懸念して、このような注文を記させていただいた。

（2）おわりにー東邦銀行へのお願い：福島県信達地方の地域史、地域経済史研究に関連してー

本書の中に、第百七銀行の内部資料の写真があった（15頁）。この写真をみるかぎり、第百七銀行の経営に深くかかわり、東邦銀行とも関係のある内池三十郎家の文書であるとみられる。内池三十郎家は、第百七銀行のみならず、製糸業、電力業など戦前福島県信達地方の地域産業経済と深いかかわりがあり、同地方の経済の発展に重要な貢献をしている。福島県地域経済史、特に福島市を中心とする信達地方の地域史、地域経済史に関する史料状況は、故山田舜氏ら福島大学経済学部のグループが研究をしていた1960年代から殆ど全くといっていいほど改善されていないと言ってよい。評者もかつて戦前福島県の金融史を研究していたが、史料のなさには本当に泣かされた。

周知のとおり、福島県信達地方は日本でも指折りの製糸養蚕地帯である。戦前日本経済にとって、もっとも重要な地域のひとつでもある。新史料による福島県地域経済史研究の深化は、単に福島地域史、地域経済史の理解の深化に止まらず、戦前日本経済史の研究と理解を大きく前進させることにも繋がることは間違いない。上記のような厳しい史料状況を打開し、研究を大きく進展させることが可能になる内池家文書の存在をはじめて世に知らしめた点で、本書の学術的貢献は著しく大きい。もし、叶うことならば、東邦銀行の皆様方に、関係者でもある（1978～90年までの期間、第５代頭取を務めたのは当主の内池佐太郎氏。同書、23～24頁）内池家を説得していただき、所蔵史料の開示、さらに言えば福島県歴史資料館など、しかるべき文化財保護施設への寄贈をしていただけるように取り計らってはいただけないものであろうか。くどいようであるが、内池家文書の文化的価値の高さは計り知れない。散逸の防止、極めて高い価値を持つ史料・文化財の保全の観点からも、佐藤稔頭取をはじめ東邦銀行の皆様方に

は、この点を是非とも強くお願い申し上げたい。このことが実現すれば、東邦銀行も重大かつ重要な社会貢献を行ったことにもなる。是非とも前向きにご検討いただけますよう、重ねてお願い申し上げる次第である。

約30年前、東邦銀行の存在を初めて知ったとき、同行のキャラクターであるピンクパンサーと「TOHO」の箱型のロゴのカラフルで派手なイメージに強烈な印象を受けたことを懐かしく思い出す。ピンクパンサーもロゴも、それらの印象も今でも変わらないが、本書を通読して、この30年間だけみても、東邦銀行は時代とともに常に変わり続け、進化し続けていることを認識した。このことを最後に記して、拙い書評の結びとしたい。

〔追記〕

本稿に記した注文とお願いは、その後、永倉禮司氏（元東邦銀行）を介して、直接、東邦銀行にお願いしたところ、前向きにご検討いただけることになった。永倉氏、同行の関係者の皆様方に厚く御礼を申し上げる次第である。